

強調する「従順さ」や夫婦間ヒエラルキーに回収されてしまいかねない。つまりアレクサンドラ皇后の言説は、平等性と従順性という相矛盾する両側面を備えたものとして響くことになる。ただ他方で、アレクサンドラ皇后の夫婦像・家族像——平等性を基盤として夫が外で働き、妻が家事全般に責任をもち、互いにケアしあう夫婦・両親と子どものそろうた家族——はソ連時代および崩壊後の今日のロシアにおいて、多くの女性が経験したことのないものであり、新しい像であるともいえる。さらに、本報告の資料に見いだされる「アレクサンドラ・フョードロヴナ皇后」は、従来の皇后像から、家族を大切にする正教会の諸知識に通じた皇后像への転換を示しており、これは皇后を含めたニコライ二世一家が聖人として列聖された後にみられる傾向の一端を示しているといえよう。

一九九〇年代にロシア国内で盛んに論じられた「精神の真空」状態や道徳心の低下をめぐる議論は、宗教文化・世俗倫理教育の試験的導入をもたらすと同時に、あらたな女性像・家族像の模索をもたらした。本報告で扱った資料は、互いに異なる夫婦像・家族像を提示しており、現代のそのような模索状況を反映している。

近代医療のなかで上座仏教をいきる

——中国タイ族女性の出産から——

磯部 美里

出産とは、生物学的行為であるとともに、家族、社会、国家といった他者との関わりの中で成立する文化的事象である。そのため、宗教は出産に関わる社会規範や知識体系と密接に結びついている。これまで、ジェンダーの視点から、宗教の男性中心主義的性質が指摘されてきたが、出産においてはいかなる状況がみられるのだろうか。

本発表では上記の問いをもとに、中国雲南省西双版纳タイ族自治州に居住するタイ族を事例として、伝統的な出産の様相および近代医療的に基づく出産方法の普及によるその変化について検討する。その際、産む行為においては「主体」となりながら、産む方法においては周縁に置かれる女性の「伝統」と「近代」のはざまにみられる実践に注目する。

タイ族は中国国内に約百十五万人を数え、雲南省を中心に居住する民族である。本発表で取り上げる西双版纳タイ族は、上座仏教を厚く信仰してきた。男児が十歳頃出家し寺で文字や経典、教養を学んだ後二十歳頃に還俗するのに対し、女兒は出家できない。そのため、男性は知識保有者として村の役職や儀礼時の重要な役割を担っている。

タイ族の伝統的な出産方法についていえば、自宅出産では夫や両親といった家族や親戚が立ち会うなか出産を行ってきた。

また、出産介助者も母や祖母といった年輩女性に加え、男性の出産介助者（男性産婆）がみられ、タイ族の出産は決して「女性の世界」ではなかった。ただし、助産と難産対処という出産介助の役割の中で、助産は誰でもできるが、難産対処は男性産婆や民族医学（「タイ族医学」）的処置方法を学んだ男性しかできない。その理由は、事実上、男性のみが「タイ族医学」を学ぶことができるからである。

「タイ族医学」とは、タイ族の民間に伝わる伝統的医学が上座仏教の伝来によって発展したとされ、その理論、方法や薬草の種類などの医学知識は、経典の中に収められている。そして、治療に必要な呪術知識の習得には弟子入りが必要であり、この呪術こそ難産時に必要とされるものである。タイ族社会においては、弟子入りによる知識の習得は出家経験の有無と関わっており、結果、宗教にみられる男性中心主義的な知識体系が出産にも影響をあたえていることが指摘できる。このような「タイ族医学」的知識体系に基づく出産のあり方を本発表では伝統的出産とみなす。

一方、中華人民共和国成立後、共産党政府は近代医療の普及に尽力し、当地においても、近代医療に基づいた出産方法をとる女性助産員の育成などが進められた。特に、一九〇〇年代半ば以降施設分娩が広まり、産婆から女性医師へ、自宅から病院へと出産のあり方も変化している。このような変化に対し、次のような見方ができるように思う。一つは、出産における知識は、宗教にもとづく知識体系から近代医療的知識体系へと移行したに過ぎず、「産む」女性が周縁に置かれる状況は同じである

ること、もう一つは、少なくとも近代医療の出産方法へと移行することによって、出産においては上座仏教に基づく知識体系からは抜け出たと見なすことができることである。だが、実際に女性は宗教的知識体系から抜け出すことを望んだのだろうか。それを考えるには、「伝統」と「近代」の二項対立を超える見方が必要である。

本発表においては、最後に「伝統」と「近代」を行き来するような三つの出産に関する事例を検討する。女性は自宅出産において近代医療に基づく出産方法を取り入れたり、病院出産を決めながら伝統的出産方法に頼ったりするなど、「伝統」と「近代」の枠組みをゆさぶるような実践をしている。こうした実践を通じて、従来の上座仏教に基づく社会規範や知識もまた再解釈され、異なる意味づけを与えられていくのではないだろうか。

現代医療の現場にみる伝統宗教

——天使の病棟訪問——

石井 賀洋子

カトリック医療施設である聖霊病院は、聖霊奉持布教修道女会を母体として、一九四五年、名古屋市昭和区に設立された。その理念を「愛と奉仕」とし、「いのちの始まりとその終りを大切にします」という基本方針のもと、カトリック医療施設としての特色を打ち出している。特徴として、カトリック社会事業室の存在がある。患者と家族のケアに役立ったために、さまざま